

基礎研修 第8回：乳幼児の発達③ 3～5歳児の社会性と就学準備

1. はじめに：「わたし」から「わたしたち」へ、広がる世界

基礎研修第8回のテーマは「3～5歳児の発達」です。

1・2歳児期に「わたし」という強い自我を確立した子どもたちは、3歳を過ぎると、いよいよ「わたしたち」という仲間(社会)の世界へと冒険の舞台を広げていきます。この時期は、友達との関わりの中で、協力する喜びや、意見がぶつかる葛藤を経験し、人として生きていく上で不可欠な社会性の土台を築く、非常に重要な時期です。

また、心と体が大きく成長し、就学(小学校入学)という次の大きなステップを見据え始める時期でもあります。

この研修では、心豊かで、ちょっぴり複雑な3～5歳児の内面を理解し、その社会性の育ちを支え、就学への期待感を育むための、私たちの専門的な関わりについて学んでいきましょう。

2. 遊びの進化：社会性を育む「ごっこ遊び」と「ルールのある遊び」

この時期の子どもの発達を最も象徴するのが「遊びの進化」です。一人で遊ぶことから、友達と一緒に遊ぶことへと、遊びの質が大きく変化します。

① ごっこ遊び・見立て遊びの発展

身近な人の役割を真似たり(お母さん、お店屋さんなど)、積み木を車に見立てたりする遊びが、より複雑で、物語性のあるものに発展します。

- 2～3歳頃(平行遊び)：同じ空間で、それぞれが同じような遊びをしています。まだ直接的な関わりは少ない段階。
- 3～4歳頃(連合遊び)：「おうちごっこ」など共通のテーマで遊び始めますが、まだ役割分担は曖昧で、それぞれが自分のやりたいことをしていることが多い段階。
- 4～5歳頃(協同遊び)：「お医者さんごっこ」などで、「私はお医者さん」「あなたは患者さん」と役割を分担し、共通のイメージやストーリーを共有しながら遊べるようになります。

ごっこ遊びが育む力：

- 想像力・創造力：自分ではない誰かになりきり、目の前にないものをあるかのようにイメージする力。
- 言葉の力：役になりきって会話をすることで、語彙や表現力が豊かになります。
- 社会性・協調性：友達とイメージを共有し、役割を調整する中で、相手の気持ちを考えたり、自分の要求を伝えたりする力が育ちます。

② ルールのある遊びの始まり

鬼ごっこや、簡単なボードゲームなど、共通のルールを理解し、それを守りながら遊ぶことができるよ

うになってきます。

ルールのある遊びが育む力:

- 社会的なルールの理解: 社会には守るべき約束事があることを学びます。
- 衝動のコントロール: 「タッチしたいけど、今は自分が鬼じゃないから我慢する」など、自分の欲求をルールに従ってコントロールする力が育ちます。
- 葛藤を乗り越える力: 「負けて悔しい」という気持ちを経験し、それを乗り越えて「もう一回やろう!」と思える心の強さが育ちます。

3. 心と頭の大きな成長: 認知能力の発達

この時期は、物事を理解し、考え、記憶する力(＝認知能力)も大きく成長します。

認知能力の発達	具体的な姿の例	私たちの支援
数の理解	りんごが3つある、といった具体的なモノの数を数えられるようになる。	「おやつを3つどうぞ」「積み木を5個積んでみよう」など、生活の中で数に触れる機会を作る。
文字への興味	自分の名前や、絵本に出てくる簡単な文字に興味を持ち、読もうとしたり、真似て書こうとしたりする。	子どもの持ち物に名前を書き、自分のマークと一緒に文字を意識させる。無理に教え込まず、興味に寄り添う。
時間の概念の芽生え	「昨日」「今日」「明日」や、「朝」「夜」など、少しずつ時間の流れが分かり始める。	「おやつ後にお散歩に行こうね」など、次の活動の見通しを言葉で伝える。
科学する心の芽生え	「どうして空は青いの?」「虫はどうして飛ぶの?」など、身の回りの事象に興味を持ち、理由を知りたがる。	「なんでだろうね?」と子どもの問いを受け止め、一緒に図鑑で調べたり、実際に観察したりする。
他者の心の推測	「○○ちゃん、泣いてるから悲しいのかな」と、自分とは違う他者の気持ちを少しずつ想像できるようになる。(心の理論の芽生え)	「○○君は、おもちゃを取られて悲しかったんだね」と、葛藤場面で互いの気持ちを言葉にして翻訳し、橋渡しをする。

4. 就学へのなめらかな接続: 今、大切にしたいこと

5歳頃になると、子ども自身も「小学生になる」ことを意識し始めます。この時期は、小学校への期待感を育み、自信を持って次のステップに進めるよう、「育ちの連続性」を意識した関わりが重要になります。

【注意】就学準備とは、ひらがなや計算を前倒しで教え込む「早期教育」のことではありません。それよりも、小学校以降の長い学びの土台となる「非認知能力」を育むことが、幼児期には何よりも大切です。

非認知能力とは？

テストの点数などでは測れない、人間としての「生きる力」の土台となる内面的な力のことです。

- 自己肯定感: 「自分は大切な存在だ」と思える気持ち。
- 意欲・主体性: 「やってみたい！」と自分から物事に取り組む力。
- 協調性: 友達と協力し、目標を達成する力。
- 自制心・忍耐力: 自分の気持ちをコントロールし、最後までやり抜く力。
- 創造性: 新しいものを生み出したり、問題を解決したりする力。

これらの力は、ドリル学習ではなく、日々の豊かな遊びの中でこそ、最も効果的に育まれていきます。

私たちが就学に向けてできること

- ① 基本的な生活習慣の自立:
 - 自分で衣服の着脱や後始末ができる。
 - 自分の持ち物を自分で管理しようとする。
 - 話が終わるまで、座って人の話を聞こうとする。
- ② 小学校への期待感を育む:
 - 近くの小学校まで散歩に行き、小学生の様子を見る。
 - 「小学生になったら、こんな楽しいことがあるよ」と、ポジティブなイメージを伝える。
 - 小学校ごっこなどの遊びを取り入れる。
- ③ 自信をつける経験を豊かにする:
 - 係活動などで、自分の「役割」を責任を持って果たす経験をさせる。
 - 運動会や発表会など、目標に向かって友達と協力する経験を大切にする。
 - 小さな「できた！」をたくさん認め、褒めることで、「やればできる」という感覚を育む。

【グループワーク】(20分)

事例:

5歳のG君とH君が、積み木コーナーで一つの赤いブロックを取り合って、ケンカになってしまいました。G君は「僕が先に見つけたのに！」と主張し、H君は「僕だってお城を作るのに必要なんだ！」と言って譲りません。

<話し合いのポイント>

- この状況で、あなたはどのように仲立ちをしますか？

- まず、それぞれの子どもの気持ちをどのように受け止めますか？（具体的な声かけ）
 - この葛藤を、子どもたちの社会性（人間関係）を育むチャンスと捉え、どのような解決策を子どもたち自身が考えられるように促しますか？
-

【講師用原稿(スクリプト)】(想定時間:120分)

はじめに(10分)

皆さん、こんにちは。基礎研修第8回を始めます。本日のテーマは「3～5歳児の発達」です。0歳児で「人を信じる力」、1・2歳児で「自分を信じる力」を育んだ子どもたちは、いよいよ3歳を過ぎると、その二つの力を携えて、「仲間(社会)」という新しい世界への大冒険を始めます。

この時期の子どもたちは、まるで小さな社会人です。仲間と協力する喜びを知り、時には意見がぶつかってケンカもする。そして、その葛藤を乗り越える中で、人として生きていくための最も大切なルールを学んでいきます。

今日は、そんなちょっぴり複雑で、人間味あふれる3～5歳児の世界を紐解き、彼らが自信を持って次のステージ(小学校)へ羽ばたいていくための、私たちの役割について考えていきましょう。

遊びの進化:社会性を育む「ごっこ遊び」と「ルールのある遊び」(35分)

この時期の発達を最もよく表しているのが、「遊びの進化」です。特に重要なのが「ごっこ遊び」です。

お手元の資料にあるように、ごっこ遊びは年齢と共に進化していきます。最初は一人で遊んでいたのが、隣で同じ遊びをするようになり、やがて「一緒にお店屋さんやろう!」と、共通のイメージを持って遊べるようになります。

このごっこ遊び、ただの真似っこではありません。実は、子どもの成長にとって計り知れない価値があります。

例えば、「お医者さんごっこ」。お医者さん役の子は、「患者さんは不安だろうから、優しく声をかけよう」と考えます。患者さん役の子は、「注射はちょっと怖いな」と感じます。このように、自分ではない誰かの役になりきることで、他者の視点に立ち、気持ちを想像する力が育まれるのです。これは、AIには決して真似できない、人間ならではの高度な能力の基礎となります。

そしてもう一つの大きな進化が、「ルールのある遊び」です。

鬼ごっこを例に考えてみましょう。鬼ごっこには、「鬼がタッチしたら交代する」「線の外に出たらダメ」といったルールがあります。この遊びが成立するためには、参加者全員が、そのルールを理解し、守る必要があります。

「タッチしたい!」という自分の衝動を、ルールに従ってコントロールする。負けて悔しい気持ちを乗り越えて、「もう一回!」と遊びを続ける。この経験こそが、将来、社会のルールを守ったり、困難に立ち向かったりする力の、まさに原点となるのです。

心と頭の大きな成長:認知能力の発達(20分)

この時期は、社会性だけでなく、物事を理解し、考える力、つまり「認知能力」も大きく飛躍します。

お手元の資料にあるように、「数」や「文字」に興味を持ち始めます。

そして、何よりも特徴的なのが、「なぜ?」「どうして?」という質問の嵐です。

「どうして空は青いの?」「どうして僕は男の子なの?」...皆さんも、答えに詰まるような質問攻めにあった経験があるのではないのでしょうか。

この「なぜなぜ期」は、子どもの知的好奇心が爆発している証拠です。ここで大切なのは、すぐに正解を教えることではありません。「なんでだろうね?不思議だね」と、子どもの「知りたい」という気持

ちに共感し、一緒に考える姿勢です。そして、「図鑑で調べてみようか」と、自分で答えを見つける方法を一緒に体験させてあげること。この経験が、生涯にわたる探求心の基礎を育むのです。

休憩(10分)

少し頭を使ったので、ここで10分間の休憩を取りましょう。

就学へのなめらかな接続: 今、大切にしたいこと(30分)

さて、最後のテーマは「就学への準備」です。

5歳くらいになると、保護者の方からも「ひらがなは書けた方がいいですか?」といった相談が増えてくる時期ですね。

ここで、私たちは専門職として、明確に伝えるべきことがあります。幼児期における就学準備とは、決してひらがなや計算のドリルをさせる「早期教育」のことではない、ということです。

もちろん、文字や数への興味は大切にすべきです。しかし、それ以上に幼児期に育むべきなのが、お手元の資料にある「非認知能力」です。

テストでは測れない、「生きる力」そのものです。例えば、友達と協力する力、失敗しても諦めない力、自分はできると信じる力。こうした力は、残念ながらドリル学習では身につけません。

では、非認知能力はどこで育つのか。それは、これまで話してきた「豊かな遊び」の中です。

ごっこ遊びで友達と協力する中で協調性が育ち、ルールのある遊びで悔しさを乗り越える中で忍耐力が育ちます。そして、私たちの温かい関わりの中で、「自分は愛されている、大切な存在だ」という自己肯定感が育まれていくのです。

この非認知能力という、いわば「心のOS」がしっかりとインストールされていれば、小学校に入ってから新しい知識(アプリ)をどんどん吸収していくことができます。

では、この非認知能力、特に社会性を育む場面として、ケンカの仲立ちについて考えてみましょう。

お手元のケースについて、グループで話し合ってください。このケンカを、二人が成長するチャンスに変えるための、皆さんの専門的な関わりを期待しています。時間は20分です。

「まず、お互いの言い分を最後までじっくり聴いてあげる」「『どっちもこのブロックが使いたかったんだね』と気持ちを代弁する」「『どうすれば二人とも使えるかな?』と解決策を本人たちに考えさせる」...素晴らしいですね。まさに、答えを与えるのではなく、子どもたちが自分で考えるプロセスを支えること。それが私たちの役割です。

まとめ(5分)

皆さん、お疲れ様でした。本日は、3~5歳児の社会性や認知能力の発達、そして就学に向けて本当に大切なことについて学びました。

この時期の子どもたちは、小さな体で、友情、協力、葛藤、達成感といった、人間社会の縮図のようなドラマを毎日生きています。私たちの役割は、そのドラマの脚本家や監督になることではありません。子どもたちが安心して主役を演じられるよう、舞台を整え、時にそっと背中を押し、最高の観客として拍手を送る「舞台監督」のような存在です。

豊かな遊びを通して非認知能力という最高の贈り物を子どもたちに手渡し、自信を持って「いってきます!」と小学校の門をくぐるよう、明日からの支援に臨んでいきましょう。

本日はありがとうございました。